陳舜臣

江は流れず

小説 日清戦争

上

陳舜臣

江は流れず 上

中央公論社

江は流れず　小説日清戦争　上

定価一二〇〇円

©一九八一

昭和五十六年七月十日初版印刷
昭和五十六年七月二十日初版発行

著者　陳舜臣

発行者　高梨茂

印刷　三晃印刷
製本　小泉製本

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二-八-七
振替　東京一-三四

検印廃止

目

次

第一章　提督と青年　7
第二章　大院君捕わる　35
第三章　乱のあと　61
第四章　風雲急なり　88
第五章　その前夜　114
第六章　火は挙がる　140
第七章　崩壊　168

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第八章　帰郷　194
第九章　復帰の日　220
第十章　新しい局面　246
第十一章　人は天　271
第十二章　自主への道　295
第十三章　北洋の人　322

江は流れず

小説　日清戦争

上

第一章　提督と青年

1

……七月、水師統領丁公汝昌と偕に各船を率いて済師（増援軍）を回防す。復た丁公と偕に先に韓境沿海一帯に赴き杉板（サンパン船）を盪かして陸兵下岸処（上陸地点）を探査せるに、中途、潮退きて舟は灘に膠す。公及び丁公は、赤足にて砂石を履み一里許り行く。登岸するに迨び、両足、皆破れ裂けたり。丁公笑って曰く。紈袴少年（良家の青年）にして亦た能く是の若きか。……

これは『容庵弟子記』にみえる文章である。容庵とは袁世凱の号であり、彼の門弟の沈租憲と呉闓生が撰した四巻の著作が本書である。内容は袁世凱の事蹟を記したものだが、門弟の著であるから、袁世凱に都合のよいように書かれているのはいうまでもない。袁世凱自身の自慢話として読むべきであろう。右の一節も、おそらく、袁世凱が若いころの思い出として、門弟や家族に

なんどもくり返して語りきかせた情景にちがいない。

文中に「丁公」とあるのは、のちに日清戦争で自決した清国水師提督の丁汝昌のことであり、ただ「公」とあるのは袁世凱のことなのだ。

七月とあるが、一八八二年（清国の光緒八年、日本の明治十五年）、すなわち壬午の年のことである。朝鮮で壬午の変がおこり、清国が軍隊を送ったときの情景なのだ。

三千の清国増援軍は、慶軍統領呉長慶の指揮下にあり、丁汝昌がその輸送責任者であった。呉長慶の書翰によれば、船団が仁川沖に着いたのは、七月七日の辰の刻であったという。日付は陰暦なので、太陽暦にすれば八月二十日になる。辰の刻は午前八時前後に相当する。じっさいに上陸を開始したのは、翌日の辰の刻であった。

まる一日を要したのは、仁川の上陸しやすい地点に、すでに日本船が七艘停泊していたので、そこを避けて、別の上陸地点をもとめたためであった。清国船団はそこから三十数キロはなれた南陽府の沖に停泊したのである。

上陸地点をしらべるために、袁世凱は丁汝昌とサンパン船に乗って接岸しようとしたが、途中で潮が退き、船がうごかなくなった。そこで二人ははだしで一里ほど歩いて上陸したという。清代の一里は五七六メートルにすぎない。石ころや貝殻の砕片の多いところを歩いたので、はだしの足は傷だらけで、血が噴き出している。丁汝昌はそれをみて、

「お坊ちゃんにしてはようやるのう」

と、笑いながら言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

袁世凱は丁汝昌と肩をならべて軍隊を率いたような口ぶりだが、このときの二人の身分には大差があった。後年、総督、大総統にまでなった袁世凱の回顧談では、ともすれば若いころの身分観に一種の錯覚現象がおこるのかもしれない。

このときの丁汝昌は、派遣軍司令官の呉長慶と同格の将軍であり、袁世凱は呉長慶の一幕僚にすぎなかった。幕僚または幕客と呼ばれるのは、個人的な私設秘書である。国家から正式に任命された官吏ではない。そもそも袁世凱は科挙にも合格していない。ノンキャリア組である。

幕僚は仕える主人の推薦で、中央政府から任命を受けることもあるが、それにはそれ相応の理由がなければならない。

袁世凱は朝鮮における活躍によって、あるじの呉長慶の推挙をうけ、

――旨を奉じ、同知を以て用い、並びに花翎を賜う。

ことになった。

同知とは知府（府知事）の副で、正五品の官である。花翎とは孔雀の羽で作った装飾で、礼帽のうしろに垂らすものだが、とくに功績のあった五品以上の官吏に下賜された。

これがこの年の九月のことである。したがって、七月の朝鮮上陸の時点では、袁世凱はまだ無官の人物にすぎなかった。従一品官である水師提督の丁汝昌とは、対等のやりとりはできないはずだった。

「わしの足を見たまえ」

砂浜に腰をおろして、丁汝昌は袁世凱のほうに足をつき出した。

「ほう。……」
袁世凱は目をみはった。提督の足のうらは、いかにもぶ厚そうだし、まるで血は流れていないのだ。
「おなじ砂石の浜を歩いたのじゃぞ」
と、丁汝昌は言った。
「お強いですなあ」
「わらじよりは強いはずだ」
「まるで牛の革のようですね」
「きたえておるわい。は、は、は……」
丁汝昌は大声で笑った。
「すごいなあ」
袁世凱は提督の足のうらをのぞき込むようにして言った。屈託のない声であった。
(紈袴少年。……)
丁汝昌はもういちどそのことばを、心のなかにもらした。紈袴とは白い練絹のハカマの意味で、むかし貴族の子弟が穿いたことから、名門出身者を指すことばとなった。
丁汝昌はふと袁世凱に羨望をかんじた。相手は二十四歳の無官の青年であるが、名族として知られた河南項城の袁家の出身なのだ。丁自身は安徽廬江の貧農の家に生まれた。そして淮軍の一兵卒から、苦しい下積み時代を経験して、軍の首脳に昇進したのである。丁稚からたたきあげた

大会社の社長が、名門出身の新入社員の育ちのよさに、ふとねたましさをおぼえるのに似ている。

彼は足を砂浜におろして、袁世凱の顔をしげしげとみつめた。

「どうかなさいましたか？」

と、袁世凱は訊いた。

「あんたにあまり足のうらをみられて、羞ずかしくなったよ」

「羞ずかしいなんて、おかしいではありませんか。……きたえるのはいいことでしょう。私もこうと知っていたら、はだしで山野を駆けて、足のうらをきたえておくのでした」

「いまからでも遅くはないぞ」

「そうですね。……やりましょうか」

「好きなようにするがよい」

丁汝昌は呟いた。彼は自分の足をきたえようとしたのではない。貧しい家に生まれ、少年時代、靴など穿いたことがなかったのだ。軍に身を投じたのも、食わんがためであった。兵卒になるなど、よほど食いつめた人間と思われた時代のことである。

――乞食よりはましだろう。

そんな気持で軍営にはいった。兵卒になった者は、たいてい似たりよったりである。丁汝昌がほかの連中とちがっていたのは、「志」をもっていたことであろう。ともあれ兵卒となったからには、この世界で頭角をあらわそうという志があった。

その日暮しの、あぶれ者根性揃いの兵卒のなかで、すこしでもまともであれば、頭角をあらわ

すのはそれほど困難ではない。極端にいえば、ふつうにやっておれば、いやでも目立つのである。

彼は劉銘伝の部下となり、捻軍討伐に従軍した。劉銘伝は李鴻章の創始した義勇軍「淮軍」に所属した将軍である。

捻軍というのは、南方の太平天国と呼応するかのように、河南、安徽、山東方面で造反をおこした集団であった。「捻」とはグループを結ぶという意味で、そのはじまりは農村共同体のなかに生まれた遊侠の集団であったという。当時専売であった塩の密売に関係していたともいわれる。非合法の仕事をしておれば、自衛のために武装することになる。飢饉がおこり、武装集団が起ちあがったのだ。蒙古出身の将軍僧格林沁（サンゴリンチン）が蒙古騎兵を率いて捻軍と戦ったが、彼はあえなく敗北してしまった。

それほど強い造反軍を、李鴻章は分断作戦をとって、最終的に鎮圧したのである。政府軍の根幹は淮軍であった。丁汝昌は捻軍討伐に手柄を立て、下級将校から中幹将校へ昇進し、さらに軍の最高首脳陣にはいった。

――やつは字が読めたからな。

むかしの仲間はやっかみ半分にそう言った。たしかに彼は勉強が好きであった。少年時代だけではなく、軍隊にはいってからも、勉学をつづけた。

しかし、なによりも彼に幸いしたのは、国軍では数すくない水師の将軍だったことであろう。彼の生まれた廬江県は水郷であった。子供のころから水に慣れている。舟を下駄のようにして育った。高級軍官になってから、水師に転じることになった。陸軍では多士済々で、抜きん出るこ

とは困難であったろう。海軍畑では、はじめから競争者はすくなかった。

（ただの幸運か？）

（いや、おれはおれなりに努力した）

彼はなんども自問自答した。外国語のできる幕客を、多額の給料を出して雇い、海軍関係の書物を訳させ、新知識の吸収につとめたのである。海軍にかんするかぎり、彼は自他ともに第一人者と評価された。

第一人者はさびしい。海軍について、おなじレベルで語り合える相手がいない。理解されないのはさびしいものだ。

目をとじると、このあいだのヨーロッパ旅行のさまざまな場面が、まぶたのうらにうかんでくる。――霧にかすむロンドンの町なみ、パリの凱旋門、そしてベルリンのオペラ……一年もたっていないので、思い出のシーンはまだあざやかである。

李鴻章に命じられて、彼は軍艦購入のためイギリスへ派遣され、フランスやドイツの海軍を視察したのである。

目をあけた。

沖に停泊している清国船団のすがたが目にはいった。靄がかかって影がおぼろに見えるだけである。彼が乗ってきた軍艦「威遠」、兵員を乗せた招商局の「鎮東」と「日新」、そして武器弾薬を積んだ「泰安」……

「威風堂々としておりますね」

と、袁世凱は言った。
「まだまだ及ばぬわ」
と、丁汝昌は答えた。沖の船団の影から目をはなさずに。
「ほう。これで？」
「イギリスの水師を見た目には、われらの艦隊は玩具も同然。……」
丁汝昌は腰をあげて、あたりを見まわした。上陸地点の選定という、自分の任務に戻ったのである。
「なにかお役に立つでしょうか？」
と、袁世凱は訊いた。
「あんたには役に立ってもらおうなどと思っていない。……ただ海軍のことをよく知ってもらいたいだけじゃな」
「海軍のことを？」
「えらい人には、海軍をよく理解してもらわなければ」
「私なんか、えらい人なんて、そんなものではありません」
「将来のえらい人だよ」
丁汝昌はそう言って笑ったが、その横顔はさびしげにみえた。

2

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com